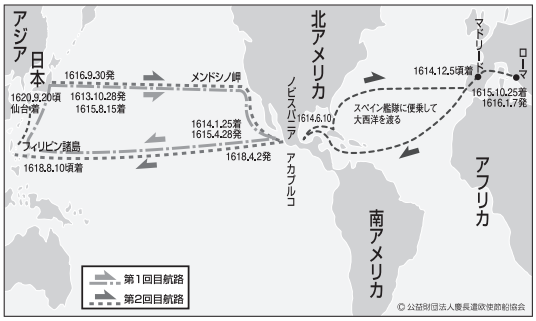
慶長遣欧使節とサン・ファン・バウティスタ号

慶長遣欧使節は慶長18年（1613年）、スペインの植民地であったメキシコとの直接貿易と、それに必要なキリスト教宣教師の派遣を目的に、仙台藩主伊達政宗が派遣した使節団です。伊達家家臣の支倉常長とスペイン人宣教師ルイス・ソテロが大使となり、月の浦（現在の石巻市）から出帆しました。乗船は藩内から切り出された木材で建造された洋式帆船（ガレオン船）で、サン・ファン・バウティスタ号と言います。メキシコ副王には通商の決定権がないため、一行はスペイン船で大西洋をスペインに渡り、首都マドリードで国王フェリーペ3世に会い、親書を渡します。その後ローマに向かってローマ教皇パウロ5世に会います。ローマでは宣教師の派遣を要請し、その間に市議会から貴族に列せられ、公民権証書を与えられました。使節としての交渉は、日本国内のキリスト教に対する情勢の変化から不成功に終わり、常長は7年後に仙台に戻ります。

慶長使節船「サン・ファン・バウティスタ」
宮城県慶長使節船ミュージアムに展示中



サン・ファン・バウティスタ航海図と慶長使節の行程図（推定）

慶長遣欧使節は伊達藩とメキシコ、ヨーロッパの貴重な交流の歴史です。当時、徳川幕府も同じ計画を進めており、政宗は幕府と連絡をとりながら準備を進めていました。折しも出帆の2年前の慶長16年（1611年）に、仙台藩は東日本大震災並みの慶長三陸（奥州）地震に見舞われており、政宗は戦国大名らしい南蛮への興味もあったと思われますが、南蛮貿易による藩の財政立て直しも期待していたのではないかと考えられています。

鎖国とともに、使節のことは秘められていましたが、明治6年に岩倉具視の一行がベネツィアを訪問した際、古文所館に保存されていた支倉常長の書状2通を見せられ、この使節の事が世に知られるようになりました。

常長らは、当時のヨーロッパ社会に日本人は教養があり、文化程度が高い国であることを示し、鎖国に入る前の時代に貴重な交流を実現しました。彼の頭の中にあった思いはどのようなものだったでしょう。今回、次の時代を拓こうとした彼らに因み、サン・ファン・バウティスタ号を本学術集会のシンボルマークにいたしました。

仙台国際センターの向い（地下鉄駅と反対側）にあります仙台市博物館では常設展「慶長遣欧使節」が展示されており、またミニシアターでは「支倉常長―光と影」が午前10時から1時間毎に20分間上映されています。お時間を見つけてご覧いただければ幸いです。また、サン・ファン・バウティスタ号は23年前に復元され、石巻市の宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）に係留されていますが、震災と老朽化のため残念ながら乗船はできなくなりました。